

「ポーランド農民」論ノート(1)初期トーマスの基本的視座

水野, 節夫 / ミズノ, セツオ / MIZUNO, Setsuo

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

25

(号 / Number)

3-4

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

1979-02-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018157>

初期トーマスの基本的視座

——『ポーランド農民』論ノート(二)——

水野節夫

- 一 はじめに——なぜ『ポーランド農民』なのか——
- 二 伝記的事実から
- 三 トーマスと民族心理学
- 四 男女論と偏見論
- 五 初期トーマスの基本的視座

一 はじめに——なぜ『ポーランド農民』なのか——

アメリカ社会学史上、一九二〇年代から三〇年代にかけて隆盛をきわめたシカゴ社会学派、この学派は、「人種の坩堝」といわれるアメリカ合州国の中でも、とりわけそう呼ばれるにふさわしい大都市シカゴを舞台にして、フィールド調査と理論との統合をめざしつつ精力的な調査研究をおこなったこと(1)で有名である。W・I・トーマス(一八六三—一九四七)は、この学派のそうした基本的特徴を刻印づける上で、R・パークとともに決定的な役割をはたした

といわれている。⁽²⁾ その際、最も重要な出来事が、二二四四頁にも及ぶW・I・トーマスとF・ズナニエツキの共著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』〔以下『ポーランド農民』と略記〕の出版であったことは言うまでもない。⁽³⁾

ここで批判的検討を加えたいのは、主としてこの『ポーランド農民』である。

なぜ、この書物の批判的検討がなされなければならないのか。私としては、次の二つの理由をあげることにした。一つは、『ポーランド農民』をめぐる研究状況には空白があつて、この書物の実質的検討がいまだになされていない、という現状認識である。もう一つは、ミクロ社会学とマクロ社会学とをどう関連づけていくかという問題を考えていく上で、『ポーランド農民』で展開されているポーランド農民の具体的な把握の仕方がいくつかの手がかりを提供してくれるのではないか、というポーランド農民論に関する見通しに関連している。

まず第一点から説明しよう。世の中には、有名でありながら、あまり詳しい検討を加えられないままに葬りさられるたぐいの書物があるものだが、『ポーランド農民』もそうした部類に属すると言つていいのではないか。こうした想いが強く私の心をよぎる。言いかえれば、トーマス、とりわけ彼の『ポーランド農民』の社会学史上での評価はきわめて高いにもかかわらず、日本におけるトーマス研究はもろんのこと、研究上の蓄積が相当見うけられる英語圏の場合でさえ、トーマス研究は、おおむね『ポーランド農民』の冒頭を飾る「方法的ノート」⁽⁵⁾ についてのコメントや、ポーランド農民社会やポーランド農民の具体的分析とは切り離されてなされる概念的枠組の批判的紹介に向けられているか、あるいは、社会科学において人間的ドキュメントをどう位置づけるべきか、といった議論に限られている。端的に言つて、これまでの『ポーランド農民』研究は、そこで提示されている社会科学方法論や社会学的概念の

フォーマルな検討という水準にとどまっていたのである。

こうした現状認識の真偽を確かめるためには、たとえば、「状況の定義」にしる、「社会的解体」にしる、「四つの願望」にしる、あるいは対概念としての「態度」と「価値」にしる、その他どの概念をとりあげてもいいのだが、トーマスが『ポーランド農民』の中で用いているそれらの概念が、どういった論じられ方をしてきたかを見てみるだけで十分である。もちろん、それらの概念がどういった内容を持ったものであるか、という点については、すでによく知られているとわかっていい。しかし、そこからいま一步踏みこんで、では、それらの概念は『ポーランド農民』全体の議論展開の中で、あるいはトーマスのポーランド農民論およびポーランド農民社会論というコンテクストの中で、どういう位置づけを与えられているのか、と尋ねてみれば、そもそもそうした問題のたて方自体が見られないということが明らかになるはずである。

たとえば、社会学に対するトーマスの貢献を析出するという観点から、四回にわたってかなり詳細にトーマスの議論の変遷を跡づけたK・ヤングでさえ『ポーランド農民』の紹介は「方法論的ノート」の検討だけですませているし、トーマス論の中では最も重要な部類に属すると思われるブルーマー論文の場合には、明示的に方法論的問題の批判的検討に課題が限定されている。さらに、『ポーランド農民』論としてはかなり興味深い切りこみ方を見せているジャーヴィッツやマツジの場合でさえ、『ポーランド農民』の実質的検討如何という観点からすれば、やはり不十分と言わざるをえないのである。

私がここで「実質的検討」と呼ぶのは、『ポーランド農民』の冒頭をかざる、有名な「方法論的ノート」に続く部分、とりわけ第一部「第一次集団組織」の「序論」（といっても、二二六頁にも及ぶものだが）でのポーランド農民

社会論や、それに続く個所で紹介されている、七六四通のポーランド農民の手紙の随所に付されたおびただしい注、さらには第四部「一移民の生活記録」への「序論」で展開されている社会的・パーソナリティー論とか、本文のいたるところで実質上提示されているポーランド農民論の具体的紹介・検討のことである。

それはともかく、これまでの研究成果を先のような形で総括することに対しては、次のような反論がかえってくるかもしれない。すなわち、「おまえは『ポーランド農民』の実質的検討がなされていないと唱えているが、そしてかりにその主張が正しかったとしても、そうした検討などしなくてもいいのではないか。たとえば、ブルーマーが見事にやってのけたような、あるいはフォルカルトやジャンヴィッツが整理してみせてくれたような形でトーマスの理論を吟味するだけで、すでに十分なのではないか」と。トーマスから摂取すべきものが、単なる概念や理論だけであるのなら、あるいはこうした反論は成り立つかもしれない。しかし、『ポーランド農民』の真骨頂が、実は、手紙や生活記録等に付されたおびただしい脚注の中にちりばめられている、具体的なポーランド農民認識のありようのうちにあるということを確認しうる人々にとっては、『ポーランド農民』の実質的検討は、トーマスの洞察をわがものにする上で欠かすことのできない作業だといわなくてはならない。そして、まさにこの作業をすすめるにあたって関わってくるのが、他ならぬ第二の理由なのである。

今度は、この第二点の説明に移ろう。まずはじめに「ミクロ社会学」と「マクロ社会学」について簡単に触れておく。ここで「ミクロ社会学」というのは、複数の活動主体のおりなす相互行為過程のダイナミズムをも視野に入れた、対面的状況群(face-to-face situations)における活動主体のありようを把握しようとする試みのことであり、「マクロ社会学」とは、社会もしくは社会変動(societal changes)のありようの構造的把握の試みを指している。したが

つて、ミクロ社会学とマクロ社会学との関連づけという問題は、社会もしくは社会変動のありようという〈社会的次元 (societal dimension)〉と対面的状況群における活動主体のありようという〈社会的次元 (social dimension)〉との結びつけ方の問題として位置づけることができる。そして、このテーマに関わらせて言えば、私の中心的関心は、〈社会的次元〉の諸問題が〈社会的次元〉に及ぼすさまざまなインパクトに留意しつつ、ミクロ社会学の諸問題を追求するという点におかれているのだが、私はこれを、社会的存在としての個人の〈生活Ⅱ生きかた〉論という表現で言いあらわすことにしている。

そして、こうした問題関心を深めていく上で、『ポーランド農民』はきわめて示唆的な視点や枠組を提示しているように思われるのである。というのは、トーマスとズナニエツキが『ポーランド農民』で実質上提示しているのは、一九世紀後半から二〇世紀にかけてのマクロな社会変動にさらされたポーランド農民の生活世界のありようだと見なしているからである。もちろん彼らは、マクロな社会変動自体の構造的把握を試みているわけではないが——そしてこの点が彼らの議論の最大の弱点と見なしていると思うが——しかし、このマクロな社会変動がポーランド農民の生活世界に及ぼしたインパクトと、ポーランド農民の側の受けとめ方の多様性については、かなり豊富な視点を提供してくれていることは間違いない。言いかえれば、トーマスらは、ポーランド農民の多様な〈生活Ⅱ生きかた〉を重層的・多元的に把握することに、かなりの程度まで成功したのではないか、ということである。

本当にそうしたことが言えるのかどうか、あるいは、どの程度までトーマスらの試みが成功したと見なしうるのか——こうした点の詳しい検討については、『ポーランド農民』論ノート (三)——ポーランド農民の伝統的な生活世界——」以降に譲ることにして、かりにそうしたことが言えたとすれば、彼らは、社会的存在としてのポーランド

農民を把握していく上で、どのような視点や枠組を提示しているのかという点を明らかにすることが必要とされてくるに違いない。そして、まさにそうした問題意識から『ポーランド農民』に取りくもうというわけである。

以上のような認識をふまえて、これから何回かにわたって論じていくことになる『ポーランド農民』論ノート』の中心的課題を再確認しておけば、次の二つになる。すなわち、

- (一) トーマス論の焦点を、彼の社会科学方法論や社会学的概念のフォーマルな検討という水準から、『ポーランド農民』の実質的検討という水準へと移動・深化させること、
- そして、そのことを通じて、

(二) 一九世紀後半から二〇世紀にかけてのポーランド社会の一大変動過程にさらされたポーランド農民たちの〈生活〓生きかた〉を、トーマスはどのような枠組の下でどのように把握しようとしていたのかを明らかにすること、である。

このように、ここでの私の主要な関心は『ポーランド農民』のかなり詳細な検討に向けられているわけだが、今回は、『ポーランド農民』そのものの検討にすぐとりかかるといえるのではなく、それ以前のトーマスの諸論文を跡づける作業を通じて、〈初期トーマスの基本的視座〉⁽⁶⁾についての検討をおこなうことにする。これは、『ポーランド農民』⁽⁷⁾の中心的執筆者であるトーマスの基本的発想様式をおさえておきたいからである。もちろん、トーマスの思想は、その生涯を通じて「創造的実験主義」⁽⁸⁾と呼ばれるほどのきわだった変容を示していると言われているわけだが、にもかかわらず、発想の次元で見る限り、初期トーマスの中には、『ポーランド農民』で展開されている議論を準備するものがいくつも見出されるのであって、その点を踏まえておくことは、後に『ポーランド農民』を内在的に検討する

場合にも、大いに役に立つはずである。⁽⁹⁾

- (1) シカゴ学派については Robert E. L. Faris, *Chicago Sociology 1920—1932*, the University of Chicago Press, 1967 ; Fred H. Matthews, *Quest for an American Sociology: Robert E. Park and Chicago School*, McGill-Queens University Press, 1977 ; John Madge, "The Chicago School around 1930," in John Madge, *The Origins of Scientific Sociology*, The Free Press, 1962, pp. 88-125. を参照。
- (2) Robert E. L. Faris, op. cit., p. 19 ; Fred H. Matthews, op. cit., p. 97 ; Morris Janowitz(ed.), *W. I. Thomas: On Social Organization and Social Personality*, the University of Chicago Press, 1966, p. viii.
- (3) W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, 5 vols. Boston : Richard G. Badger, 1918—20 (Vols. I and II originally published by the University of Chicago Press, 1918). Second edition, 2 vols. New York : Alfred A. Knopf, 1927. Reprinted, 2 vols, New York : Dover Publications, 1958. 『ポーランド農民』の出版は、はじめ第二巻までがシカゴ大学出版会で刊行された。しかし、トーマスのスキヤンダルをきっかけにして第三巻以降はボストンのバジジャー社から出版されることになる。この第一版の出版部数は一五〇〇部。その後一九二七年に、第二版(同じく一五〇〇部)が、今度は二巻本としてクノッフ社から出版され、さらに一九五八年はドーヴァー社から翻刻版が刊行されている。以下で用いるのは、一九五八年のドーヴァー版である。なお、トーマスが巻き込まれたスキヤンダルについては、M. Janowitz, op. cit., xiv-xv ; Fred H. Matthews, op. cit., pp. 102-103. を参照。
- (4) 私の知る限り、日本でのトーマス研究としては、佐々木徹郎、大橋英寿、国歳真臣の三氏のものだけである。佐々木氏のものとしては、「社会における客観的過程の研究」『文化』第一六巻、一九五一年九月、四六九～四八五頁〔未見〕、「ウィリアム・タマスの社会学方法論」『社会学研究』第四号、一一～二五頁、「四つの願望理論について」『社会学研究』第六号、一九五二年二月、一六～二四頁、「ウィリアム・タマスの社会学の進展」『社会学評論』第八号、一九五二年、一〇三～一一九頁、「タマスの理論」『現代社会学のエッセンス』ペリカン社、一九七二年、一一七～一三二頁。大橋氏のものとしては「W・I・タマスの社会心理学」『紀要』、札幌大学教養学部札幌大学女子短期大学部、第一号、一

九六八年一二月、四一ノ五七頁。

国歳氏のものとしては、修士論文「タマス研究」(一九六六年関西学院大学院)〔未見〕、「四つの願望理論」〔関西学院大学院論叢』第一号、一九六七年、五三ノ六二頁〔未見〕、「W・I・タマスの社会学」〔鳥取大学教養部紀要』第四号、一九七〇年、五七ノ八六頁。

- (c) Harry Elmer Barnes, "William Isaac Thomas : The Fusion of Psychological and Cultural Sociology," in *An Introduction to the History of Sociology*, edited by Harry Elmer Barnes, pp. 793-804. University of Chicago Press, 1948.; Herbert Blumer, *An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America,"* Social Science Research Council, 1939.; Emory S. Bogardus, "The Sociology of William I. Thomas," in *Sociology and Social Research*, 34 (September-October, 1949) : pp. 34-48.; Gisela J. Hinkle, "The 'Four Wishes' in Thomas' Theory of Social Change," *Social Research*, 19 (December, 1952) : pp. 464-84.; Floyd Nelson House, "The Polish Peasant," in *The Development of Sociology*, pp. 283-90. McGraw-Hill, 1936.; John Madge, op. cit., chapter 3, pp. 52-87.; Don Martindale, *The Nature and Types of Sociological Theory*, pp. 347-353, Houghton Mifflin Company, 1960.; Howard W. Odum, *American Sociology : The Story of Sociology in the United States through 1950*, chapter 8, Longmans, Green and Co., 1951.; Robert E. Park, "The Sociological Methods of William Graham Sumner and of William I. Thomas and Florian Znaniecki," *Methods in Social Science : A Case Book*, edited by Stuart A. Rice, pp. 154-75. University of Chicago Press, 1931 [未見]; John W. Petras, "Changes of Emphasis in the Sociology of W. I. Thomas," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 6 (January, 1970) pp. 70-79. [未見]; Edmund H. Volkart (eds.), *Social Behavior and Personality*, Social Science Research Council, 1951.; Edmund H. Volkart, "Aspects of the Theories of William I. Thomas," *Social Research*, 20 (October, 1953) : pp. 345-57.; Edmund H. Volkart, "Thomas, W. I.," in *International Encyclopedia of the Social Sciences*, vol. 16, pp. 1-6, The Macmillan Company and the Free Press, 1968.; Kimball Young, "The Contribution of William Isaac Thomas to Sociology," *Sociology*

and Social Research, 47, Nos. 1, 2, 3, and 4 [October, 1962; January, April, and July, 1963].

- (9) トーマスの思想の時期区分としては、三期説(佐々木徹郎「ワイリアム・タマスの社会学の進展」一〇三頁、M. Janowitz, *ibid.*, pp. xviii-xxix.)、四期説(国歳真臣「W・I・タマスの社会学」五九〜六〇頁)、五期説(Kimball Young, *opt. cit.*)
などがあるが、ここでは『社会的起源のための資料集』(*Source Book for Social Origins*, University of Chicago Press, 1909)を出版し、この本の序論として「未開社会を解釈するための観点」(“Standpoint for the Interpretation of Savage Society,” *American Journal of Sociology* 15 (September, 1909) : p. 145-63.)を発表した一九〇九年までのトーマスを「初期トーマス」に続き「人種心理学」(“Race Psychology,” *American Journal of Sociology*, 17 (May, 1912) : 725-75.)を「プロシヤのポーランド人の状況」(“The Prussian-Polish Situation,” *American Journal of Sociology*, 19 (March, 1914) : p. 624-39.)等を初期トーマスから中期トーマスへの過渡期の作品と見なした上で、「現代社会における第一次集団規範の存続と教育システムにおけるその影響」(“The Persistence of Primary-group Norms in Present-day Society and Their Influence in Our Educational System,” in *Suggestions of Modern Science Concerning Education* The Macmillan Company, 1917, pp. 159-97.)以降『ポーランド農民』を中心として『不適応少女』(*The Unadjusted Girl*, Little, Brown, and Company, 1923.)までを「中期トーマス」それ以降を「後期トーマス」と位置づけることにしたい。

こうした時期区分を採用する理由は、本文でも触れたように、ここでの主要な課題が『ポーランド農民』の批判的紹介に
おかれているという事情に関連している。

まず、一九〇九年までのトーマスを「初期トーマス」と呼ぶのは、この時期までの諸論文には、「人種心理学」での議論
展開とは異なって、『ポーランド農民』を直接予感させるような内容が見られない、という点があげられる。その意味で、
「未開社会を解釈するための観点」(一九〇九)までと「人種心理学」(一九一二)以降との間には、一種の断絶があるとい
っていい。ただし、こう言ったからといって、初期トーマスと中期トーマスとの間の非連続性をことさら強調したいがため
に、そうした時期区分をしているわけではない、という点にも注意しておきたい。それどころか、そうした断絶面が見られ

るにもかかわらず、初期トーマスの基本的発想の中には、中期にまでつらなるものがあるのであって、その点を浮かびあがらせようというのが、私がここで採用している立場なのである。

なお、中期と後期とを区分してはいるが、この区分は暫定的なものであって、さしあたり、あまり大きな意味を持っていない、ということをおかなくてはならない。ちなみに、私の問題関心からすると、中期トーマスとしてあげておいた『ポーランド農民』と『不適応少女』との間に見られる、たとえば「四つの願望」の提示の仕方の相違の方が、より大きな意味を持っているのだが、この点については、後に触れることになる。

- (7) 『ポーランド農民』をトータルに把握するためには、共同執筆者であるズナニエツキの役割の確定が必要とされるわけだが、ここでは、トーマスの議論の検討だけに焦点を絞る形で話を進めていくことにしたい。これは、『ポーランド農民』の構想を計画したのはトーマスだと見なしてよいと思うからであり、また、『ポーランド農民』執筆以前のズナニエツキの著作を跡づけることは、それらが主としてポーランド語で書かれているだけに、現状では不可能だからである。

- (8) Florian Znaniecki, "William I. Thomas as a Collaborator," *Sociology and Social Research*, 32, March-April, 1948, p. 767.

- (9) 以下の議論の仕方について一言しておきたい。初期トーマス、中期トーマスといった形で時期区分を行なっていることから明らかのように、私自身、トーマスの思想に大きな変化が見られたという事実を否定するつもりはない。私がここで採用している立場はそうした事実を認めた上で、にもかかわらず、トーマスが議論をくみだしていく上で準拠した発想の次元に焦点をしばってみると、そこに、ある種の連続性が見い出せるのではないか、というものである。なお、こうした議論を展開しうる背景には、K. Young, op. cit., M. Janowitz, op. cit., 佐々木徹郎「ウィリアム・ターマスの社会学の進展」等、トーマスの思想の変遷に関するすぐれた見通しを与えてくれる諸論文がひかえていることは言うまでもない。

一一 伝記的事実から

「……抽象的法則を探求している場合でさえ、具体的な個々人の生活記録には、その他のいかなる種類の素材にも

まさる著しい優越性がある。個人的な生活記録は、……理想的タイプの社会学的素材であると言ってよい。⁽¹⁾ こうした主張に見られるように、W・I・トーマスという人物は、手紙・日記・新聞への投書・法廷記録等々といった人間的ドキュメントの活用をすすめ、生活史 (life history) の方法 (もしくは生活記録への接近視角) を提示したことで、あまりにも有名である。では、トーマス自身についての人間的ドキュメントはどうなっているか、と問うてみると、皮肉なことに、非常に少ないことに気がつく。事実、ジャノヴィッツは「W・I・トーマスに関する伝記的資料で入手しうるものはほとんどなく、あるのは、簡略な自伝的覚え書き^{フラグメント}ただ一つだけである。彼には多くの学生たちがいたわけだが、彼らのうちだれ一人として、「トーマスに関する」社会的プロフィールを書こうとはしなかったのである。⁽²⁾」と慨嘆しているほどだ。

そうした数少ない伝記的事実の中から、ここでは、さしあたり初期トーマスの問題関心のありようを探っていく上で示唆的なくつかの点を拾い出してみることにしよう。⁽³⁾

トーマスの生活史上の第一の画期もしくは転回点は、彼がテネシー大学に入学後二年目の夏にやってくる。彼は、それから五〇年近く後になって、当時を回想しながらこう述べている。「私は、大学二年生から三年生にかけての夏休み、八月のある暑い日に、自分が改心したことを思い出す。その当時としては、深い内省を行なった後、私は学問の道に進むことを決心したのである。⁽⁴⁾」若きトーマスにとって、この時点での決心がその後の生活を方向づけていく上で大きな意味を持っていたであろうことは、想像に難くない。しかし、そこで彼が「学問」という場合、それはどういう学問だったのか。それは、少なくとも、社会学や後に「社会心理学」と呼ばれるようになる学問領域ではなかった。それどころか、この当時の彼の主要な関心はギリシャ文化と生物学 (ダーウィニズムと進化論) にあったので

あって、社会研究にはほとんど何の関心も示していない。こうして彼は、一八八四年、二一才でテネシー大学を卒業後、ただちに同大学院に進学、英文学と近代言語を研究し、一八八六年にはこの分野でテネシー大初の博士号取得者となる。そして、その後は、準教授として博物学とギリシャ語を教えていた。このように、彼はすでに、二〇代の半ばにして、それらの領域で新進研究者としての順調な第一歩を踏み出しつつあったのである。それはともかく、ここで注目しておきたい第一点は、トーマスが一九才前後に学問の道に進もうと決心したということ、しかも、その際の関心領域がギリシャ文化や博物学であって、社会研究に直接関係するものではなかったということである。

第二の転回点は、ドイツ留学とそこでの民族心理学との出会いであると言っている。この当時、ドイツの大学の名声はきわだたて高く、学問の世界で野心的な若手の研究者たちにとっては、一年間のドイツ留学は、いわば「常識」となっていた。トーマスも、そうした学問上の野心を抱いていたらしく、先のような決心を固めた後には、将来のことを尋ねられると、口癖のように「ドイツへ行くつもりだ」と答えていた、という。そして、一八八八年から一八八九年にかけて、大学側の勧めにしたがって、ゲッティンゲンとベルリンに留学、古英語・古フランス語・古ドイツ語を研究する。彼は、そこでラツアルスやシュタイントールの民族心理学に興味をおぼえる。トーマスの眼にうつった限りでの民族心理学の魅力は何だったのか、という点については後に見ることにして、ここで注目しておきたい第二のポイントは、この民族心理学との出会いを媒介にして、彼の関心は社会科学の領域の諸問題へと向けられていくことになる、ということである。彼は、ドイツ留学を終えると、オバーリン大学 (Oberlin College) で英語学の教授の地位を得、一八九五年までこの地位に留まっていたが、一八九三年から一八九四年にかけて、彼が三〇才から三一才の時、オバーリン大学に在籍しつつ、新設のシカゴ大学社会学部大学院に入学、A・W・スモールとC・A・ヘンダ

トーマスの指導の下に、新たな領域での研究を開始する。ただし、ここで注意しておかなくてはならないのは、トーマスがスモールらの直接的影響を受けたわけではない、ということである。「私の関心は、……境界領域マージナルにおかれていたのであって、当時、組織化され教授されていた形での社会学にあったわけではない。つまり、スモール教授の歴史的・方法的アプローチやヘンダーソン教授の矯正コレクティブの関心には関心がなかったのである。⁽⁵⁾」このように、トーマスは言いきっている。彼がそこで境界領域への関心という場合、それは Jacques Loeb の生理学や Adolf Meyer の脳解剖学を指していた。注目すべき第三のポイントは、彼がそうした方向に踏み切った年令が三〇代の前半であったということ、言いかえれば、彼はかなり遅れて自分自身にとっての課題らしきものを見つけ出した、ということである。

それはともかく、一八九四年の夏には、「歴史社会学」という標題の下にシカゴ大学で初講義を行ない、翌一八九五年には、オバリン大学を去って、講師としてシカゴ大学に移っている。そして、一八九六年には『アメリカ社会学雑誌』(AJS)に「民族心理学の射程と方法」⁽⁶⁾を发表、同年、「両性の新陳代謝作用の差違について」で博士号を取得後、シカゴ大学の助教授の席を得ている。そして、この年再度ヨーロッパに旅立ったトーマスはかの地で、ヨーロッパ諸国民の比較研究という着想を得たのであった。この着想は、部分的にはあるが、二〇数年後に『ポーランド農民』というモノグラフの形で実現されることになる。

トーマスがシカゴ大学で新しく研究活動をはじめた当時の彼の基本姿勢を知る上では、次のような趣旨の彼の発言が参考となる。

第一は、哲学では現実を説明できないと彼が考えていたこと、

第二には、膨大な読書ノートを書きためていたので、彼の関心に関連のあるデータは、いつでも引き出せる形で分類・整理されていたということ、

第三には、生物学・心理学・民族学エスノロジーといった境界領域も含めて、広範囲にわたる読書の結果、速読の習慣を身につけていたこと、

第四には、好奇心にまかせて大都市シカゴの踏査をおこなっていたということ、
 である。⁽⁷⁾ こうした発言の基底にあるのが経験的志向性(empirical orientation)であることは言うまでもない。すでにこの当時において、そうした志向性がはっきりとした形でトーマスの中に根づいていたということ——これが注目しておきたい第四のポイントである。

- (1) W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, II, p. 1832.
- (2) M. Janowitz, op. cit., p. ix.
- (3) 以下の記述は『米の社会情勢』M. Janowitz, op. cit., H. E. Barnes, op. cit., E. W. Burgess, op. cit., "Comment by W. I. Thomas," in *An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America,"* Social Science Research Council Bulletin 44, by Herbert Blumer, pp. 82-87; Other comments, part 2, passim. New York: Social Science Research Council, 1939, P. J. Baker, "The Life Histories of W. I. Thomas and Robert E. Park," *American Journal of Sociology*, 79, (September, 1973): pp. 243-250. P. 248n°.
- (4) P. J. Baker, *ibid.*, p. 247.
- (5) *ibid.*, p. 249.
- (6) W. I. Thomas, "The Scope and Method of Folk-Psychology," *American Journal of Sociology*, 1 (January, 1896): pp. 434-45; "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," *American Journal of Sociology*, 3 (July, 1897):

pp. 31-63, Ph. D. dissertation, University of Chicago ; reprinted by the University of Chicago Press, 1897.

(7) P. J. Baker, op. cit., p. 248.

三 トーマスと民族心理学

「民族心理学の射程と方法」は、社会科学の領域でトーマスが最初に発表した論文である。これは、分量にすれば、ほんの十二ページと短いものだし、彼の論文の中でとりたててすぐれたものといふことはできないかもしれない。しかし、トーマスが初発に抱いていた問題関心の所在を知る上では、やはり見逃すことのできない内容をそなえている。彼がこの論文で追求している基本的テーマを一言で言うとしたら、それは、人間精神の発達過程をどういう枠組で把握するか、という問題だといふことができる。そして、このテーマとの関連で、民族心理学が、トーマスにとって一定の意味を持つてくるのである。それはこういうことだ。彼は、人間科学の中心課題として、「個人意識と人種意識との発達の関係の確定、ならびに両者と付随する制度や慣習との関係の確定⁽¹⁾」をあげた上で、こうした課題に正面から取りこんでいるのが、他ならぬ民族心理学なのだ、という。こうした議論の仕方にも、すでにトーマスの問題関心があらわれているのは事実なのだが、しかし、民族心理学に対する彼の「思い入れ」をうかがい知る上では、脚注での次のような規定の方が示唆的である。いわく、「それ〔民族心理学〕は、より基本的な社会的集合⁽²⁾によって示される生活方向 (life-direction) の諸条件や変化を研究する」⁽²⁾ 学問領域である、と。ここでいう「より基本的な社会的集合」が人種集団のことを指しているのかどうかははっきりしないが、そうした可能性も含めて、ここでは、民族心理学の研究対象という形で、個人をつつみこんだ集団の〈生活方向〉への関心が表明されている点に留意しておこう。

さて、それでは、先にあげた基本的テーマに対して、民族心理学はどういった貢献をしているというのだろうか。トーマスがドイツの民族心理学を評価するのは、次の二点においてである。一つは、あらゆる外的相違や地方色による違いにもかかわらず、人間精神はどこでも同一だという主張を民族心理学が提起していることである。そこから彼は「民族」発展における類似性の原則（3）を導きだしている。もう一つは、各々の文化にはそれまでの諸段階の遺風が含まれているという視点である。

これら二つの視点は、トーマスのその後の研究活動の質を大きく性格づけることになったといっている。というのは、「類似性の原則」をふまえた上で「人種」現象にアプローチするという方向を選びとったからこそ、トーマスは、人種不平等論という当時のアメリカ社会に支配的な社会的潮流の中で、人種不平等論批判を展開することができたわけだし、また、〈発展段階を異にする事象の同時存在〉という視点を確保していたからこそ、後に詳しく見るように、『ポーランド農民』の「第一部序論」で展開しているような形で、ポーランド農民社会論を論ずることができたのだから。

とはいえ、トーマスは、ドイツの民族心理学の主張をすべてそのまま鵜呑みにしていたというわけではない。それどころか、彼は、次の2点で民族心理学を批判している（5）。

一つは、個人意識と社会意識との関連づけの仕方をめぐっての批判である。より具体的に言えば、民族心理学者たちには、そうした形での関連づけという視点がそもそも欠落している、というのが、トーマスの批判点である。個人意識と社会意識との関連づけにおいては、両者のリズムにこそ注目すべきなのに、民族心理学者たちは、意識の集合的側面を強調するあまり、社会的諸条件の所産としてのみ個人を把握してしまふ、というわけだ。ここには、すでに、

個人の把握に際して、個人と社会との相互関係のありようを問題にしていくという発想があらわれている。

もう一つの批判は、「文明社会」との関連で「未開社会」をどう位置づけるかという問題をめぐっておこなわれている。未開社会を探求することによって社会成長の諸法則 (the laws of social growth) を見いだすことができる、というのだが、民族心理学の基本的な研究姿勢の一つであったわけだが、そうした立場をとる限り、未開社会も文明社会と同じだけの年輪を積んでいるのだという視点が欠落してしまう、というのである。民族心理学者たちは、未開社会が成長・展開したものととして、いわばその連続線上に文明社会を展望しようとしているのに対して、トーマスは、時の経過の中で未開社会と文明社会とをわかつことになった「社会物理学の諸法則の発見」こそが追求されるべき本来のテーマだ、と考える。そして、こうした脈落において「過去のどのような部分であっても、それを適切な形で理解するためには、現在の知識と過去の知識とを結合させなくてはならない。」⁽⁶⁾ という興味深い発言がなされることになる。先に、〈発展段階を異にする事象の同時存在〉という視点に触れておいたが、ここでは、〈現在〉と〈過去〉とをだぶらせる形での問題への接近という視点が提示されているわけだ。

どういう枠組で人間精神の発達過程を把握するか——この問題を考えていくための基礎視点を提示することが、この論文での彼の問題意識だ、と先に述べておいたわけだが、以上のような形で民族心理学の批判的検討、とりわけ民族発展における類似性の原則をふまえて、彼が着目してくるのは、当時の生理学者たちが注目していた刺激感受性 (irritability) という現象である。「刺激感受性」というのは生物に示差^{ディステインクティブ}的な特性である。植物や動物がこの特性をそなえているからこそ、蓄積されたエネルギーは外的刺激によって解放される。したがってそれは身体的・心的生活の基盤なのである。⁽⁷⁾「この説明からも明らかのように、〈外的刺激に反応しうる、個体の主体的条件〉を指して、刺

激感受性と呼んでいることがわかる。

彼は、この現象を、人種の相違に基礎をおく方法をのりこえていく際の基礎視点と見なしている。つまり、所与としての人種の相違にもたれかかることなく人間精神の発達過程を説明しうる、より基本的な方法を構築していく上で、この〈激感受性〉が基本的に重要だというのである。それは、トーマスの見るところ、この特性を所与とすることによって、人間の心的エネルギーを解釈するための手がかりを見いだすことができるからである。

激感受性とは、外的刺激に反応しうる、個体の主体的条件のことだと言ったわけだが、この論文でトーマスが行なっている外的刺激の性格づけに関して、ここでは、特に次の二点に注目しておきたい。

一つは、外的刺激のありようと、ある社会に支配的な制御(control)の形態との関連である。後に見るように、活動主体による環境の制御(control of the environment)というのは、初期トーマスにとって、基本的な重要性をおびているのだが、そうした発想の原基ともいべき制御の形態への着目が、強制的刺激(mandatory stimuli)からの自立化というテーマとの関連でなされている。トーマスによれば、社会組織のより低い形態や子供は、主として強制的刺激によってコントロールされているのだが、それというのも、そこでは、「感情を基礎とした行為(action based on feeling)」が優位を占めているからである。これに対して、「知識を基礎とした行為(action based on knowledge)」が優位を占める社会では、禁制や法律制定を通じて外的刺激を選択する力がついてくる⁽⁸⁾、というのである。

正直な話、こうした形で「知識」と「感情」とを対比させるやり方自体には疑問を感じざるをえないが、この点については別の機会に論ずるつもりでいるので、ここではただ、「感情を基礎とした行為」から「知識を基礎とした行

為」へと移行するにつれて、強制的刺激からの自立化が進展するものと、この時期のトーマスが見ている点を確認するだけに留めておきたい。

もう一つのポイントは、原初的刺激として食物と性とを考えていることである。「食物と性とは、楳円の焦点のように、全過程がその周囲を回転する二点をなしている。それらは行為と文化にとって、偉大な原初的刺激であった。……大切なことは、食物と性が社会生活の環元不可能な要因だということ（⁹）を認めることである。」このように、それらは、社会集団の〈生活方向〉を水路づけていく原初的な刺激として特異な位置づけを与えられているわけである。

トーマスにおける初発の問題関心を探り出すという観点から、かなり詳細に「民族心理学の射程と方法」の検討をおこなってきた。以上の検討から、われわれとして着目すべき諸点をここで今一度確認しておけば、次のようになる。

- (1)〈民族発展における類似性の原則〉という視点がトーマスの人種平等論批判のための、一つの基礎視角となっているが、

- (2)〈发展阶段を異にする事象の同時存在〉や〈現在〉と〈過去〉とをだぶらせる方法への着目といった形で、社会現象の多様性への接近が試みられていること、

- (3)個人意識と社会意識との関連づけの仕方に端的に見られるように、考察の単位として、人種ではなく個人を設定し、その上で個人と社会、もしくは個人と自然との相互関係を問うという形で議論を展開していこうという姿勢が見られること、

- (4)〈刺激感受性〉でもって、人間をつき動かす心的エネルギー解釈のための手がかり・出発点にしようとしている

こと、

- (5) 強制的刺激からの自立化というテーマとの関連で、〈制御の形態〉という発想が提示されていること、
 (6) 社会生活を成り立たせている基本的な二大要因として、食物と性とを設定していること、

これらのポイントは、各々、その後のトーマスの議論展開において重要な意味をおびてくることになる。たとえば、(1)の視点は、人種の偏見や性的偏見の批判として生かされてくるわけだし、(2)の視点は、『ポーランド農民』の中では「漸進的展開 (evolution)」の観点から見た社会変動という形で現実化されているといっている。 (3)の視点は、これまた『ポーランド農民』では、「社会組織」と「個人的生活組織」とを峻別した上で、両者の相互的影響のあり方を探っていくこうとする視点へと結実化していくのであり、(4)の、いわば感受性 (sensitivity)⁽¹⁰⁾の論理は、あるいは「狩猟本能 (gaming instinct)⁽¹¹⁾」として、あるいは「新たな体験への欲望 (the desire for new experience)⁽¹²⁾」として注目されることになる。さらに、(5)の展開としての、「社会生活の合理的制御⁽¹³⁾」という問題意識は、『ポーランド農民』の「方法論的ノート」での基調を形づくっているわけだし、(6)の視点は、広義における再生産、つまり種と個体の再生産の論理を指し示している⁽¹⁴⁾のである。

このように、「民族心理学の射程と方法」には、さまざまな展開可能性を秘めた諸点が、いわば埋めこまれており、その後のトーマスは、これらのポイントを生かす形でさまざまな問題テーマ群を論じていくことになるわけだが、次には、そうした問題テーマ群のうち、初期トーマス自身が精力的に取り組み、しかも彼の基本的視座を確立していく上で中心的な役割をはたすことになったと思われる二つのテーマにしばって見ていくことにする。それらは、男女論

心圖見出しである。

- (1) W. I. Thomas. "The Scope and Method of Folk-Psychology," p. 435.
- (2) *ibid.*, p. 435.
- (3) *ibid.*, p. 440.
- (4) Richard Hofstadter. *Social Darwinism in American Thought*, chapter 9. Beacon Press 1944. を参照せよ。
- (5) W. I. Thomas, "The Scope and Method of Folk-Psychology," pp. 440-441.
- (6) *ibid.*, p. 441.
- (7) *ibid.*, p. 441.
- (8) *ibid.*, p. 443.
- (9) *ibid.*, p. 445.
- (10) *ibid.*, p. 444.
- (11) これは一九〇一年に発表された論文 (W. I. Thomas, "The Gaming Instinct," *American Journal of Sociology*, 6 (May, 1901): pp. 750-63) の標題である。
- (12) 有名な「四つの願望」のうちの二つ。その他は W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, I, pp. 72-74, II, pp. 1859-1862.; W. I. Thomas, *The Unadjusted Girl*, pp. 4-11. を参照せよ。
- (13) 「方法的ノート」の書き出しの部分について、ジャンヴィン (M. Janowitz, *op. cit.*, p. 37.) がつけた見出しの表現。
- (14) なお、このレビュー論文ではそれほど顕著に現われてはいないが、トーマスの初期の議論には、ダーウィニズムの発想が色濃く見受けられる点も見逃すことができない。たとえば W. I. Thomas, "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," p. 59; W. I. Thomas, "Sex in Primitive Industry," *American Journal of Sociology*, 4 (January, 1899): p. 477. を参照せよ。

四 男女論と偏見論

すでに「民族発展における類似性の原則」として確認しておいたように、人種間、男女間に精神的能力の差はないというのが、トーマスの確信であった。他方、経験的事実としては、人種間、男女間に相違が見られることも否定できない。このギャップをどのように説明するか——これが、初期トーマスにとっての主要な課題の一つであったといっている。そして、これから紹介する、彼の男女論、偏見論は、この課題を解き明かそうとする彼なりの試みと見なすことができる。

(1) 男女論

ここで「男女論」と呼ぶのは、さしあたり、男性と女性の相違に関する、トーマスの把握の仕方を指している。

まずはじめに、彼が行なっている男女の対比のさせ方をいくつか見ておくことにしよう。たとえば、(a)「体質上、より能動的な男性」対「体質上、より受動的な女性」⁽¹⁾とか、(b)「より動的な男性」対「より静的な女性」⁽²⁾、あるいは(c)「男性の破壊的性癖」対「女性の建設的性癖」⁽³⁾といった対比が見られる。また(d)「社会的意志の担い手であり活動能力 (capacity for action) をそなえた男性」対「社会的感情の担い手であり感情能力 (capacity for feeling) をそなえた女性」⁽⁴⁾とか、さらには(e)「集団の生活方向の統制主体であり権威主体である男性」対「社会的中核を形成し直系の担い手である女性」⁽⁵⁾といった視点も提示されている。

こうした対比のさせ方の背後にあるものは何か。トーマスの場合、食物と性とが社会生活を成立させている二大要因として重要な位置を占めている点については先に見たが、彼によれば「食物をめぐる闘争は、当初は反社会的か、

せいぜい非社会的⁽⁶⁾」なのに対して、性、より正確には生殖 (reproduction) の方は、社会的感情をはぐくむ肉体的基盤を提供する。その結果、生殖にたずさわる女性は、生理学上そうしたことのない男性に比べて、感受性の鋭さという点ですぐれている、というのである。

このように、彼は、男女の身体的、生理学的相違から議論をほりおこしながらも、要するに、生殖という種と個体の再生産とそれに付随した感受性に基盤をおく〈女性の論理〉——ここでは感情能力が優位を占めている——に対して、食物の確保という個体の維持、再生産の故に獲物を求めて放浪する〈男性の論理〉——ここでは活動能力が優位を占める——とを対置しているのである。

ここで注目しておきたいことは、〈女性の論理〉との関連で触れられている、愛他的 (altruistic) 感情⁽⁷⁾ (例、幼児に対する母親の愛情)こそ、トーマスのいう「社会性」の原基だという点である。この、愛他性を軸とした感情的結びつきを重視するという発想は、後に『ポーランド農民』の中でポーランド農民の伝統的な生活世界の論理を析出する際にも、イェ (family) や共同体 (community) のような第一次集団の成員たちを結びつけている感情的紐帯としての連帯 (solidarity) という形で受け継がれている。

先に、男性と女性の相違に関する、トーマスの把握の仕方を指して男女論と呼んでおいた。しかし、男女の相違の把握だけが、彼の男女論のすべてではない。それどころか、彼の場合、そうした試みは、〈女性に対する男性の、現状における優位は、どのようにして生み出されているのか〉という問題意識によって裏打ちされているのである。

この問題意識は、とりわけ「女性や下等人種⁽⁸⁾の精神」という論文において鮮明にあらわれている。トーマスはそこで男性の優位を生みだした要因をいくつか掲げているが、その中には、女性が男性の世界から締め出されているとい

う事実⁽⁹⁾や、肉体的特徴の相違が男女の精神生活に及ぼすインパクトについての指摘がある。

ここでは後者について説明しておこう。先にあげた対比の中に、(a)「体質上、より能動的な男性」対「体質上、より受動的な女性」というのがあった。ここでの議論は、そうした対比の延長線上にある。「活動の中心を狩猟におく男性」と「農耕と子供たちの養育を主要な活動とする女性」との対比に見られるように、彼はまず、肉体的相違が男性のたずさわる仕事(occupation)のありように及ぼす作用に着目する。

しかし、彼の関心はそうした指摘そのものにあるというわけではない。むしろ、そうした仕事の質の違いが男女の精神生活に及ぼしてくる反作用の方に向けられているのだ。トーマスによれば、狩猟を中心とした男性の活動が生み出すのは「屠殺と捕獲のための仕掛けの発明⁽¹⁰⁾」であり、そして、そうした活動体験を通じて、男性は「より自由な動きや捕捉しにくい動物の追跡と関連した、注意の建設的習慣⁽¹¹⁾」を身につけていく、という。これに対して、農耕や育児に従事する女性の活動は、精神生活や発明への刺激に乏しいと彼は考える。こうした違いが積み重なってきた結果、思考力(intelligence)の点で男女差が生みだされてきた、というのが彼の主張である。ここには、活動の質と精神のありようとを関連づけようとするトーマスの発想がすでに見られるが、この点については後述する。

(2) 偏見論

さまざまな対象を区別して把握するということ自体は、必ずしも、それらの対象を偏見の目でながめるということを意味しない。論理的には、区別の意識と偏見の意識とは別物なのである。にもかかわらず、多くの場合、区別の意識は偏見の意識へと転回しがちな傾向性を根強く持っていることも事実である。これはなぜなのか。

ここで「偏見論」というのは、こうした問題に対するトーマスの見解のことである。この見解の中には、一般的に

他者不信の傾向が見られるとか、見慣れたものとそうでないものとを区別する際、その区別は単なる価値中立的なものではなく、見慣れたものへの肯定的評価とそうでないものへの否定的評価という形で価値評価をも含みがちだとか、あるいは、肌の色のひきおこす偏見に見られるように、目に見える違いが偏見と結びつきやすい、といった指摘があるが、初期トーマスの基本的発想の特徴を探り出すという観点から、とりわけ注目に値すると思われるのは、偏見の意識の発生基盤として、母親的感情の一特性として醸成されやすい偏愛・溺愛の心理が着目されている点である。

母親的感情がすべて、偏愛、溺愛につながるかどうかについては議論がわかれるところだと思いが、トーマスは、母親の主要な関心が幼児にのみ収斂されることを指して、偏愛、溺愛と呼んでいる。そして、母親が子供を溺愛するようになる、その子供に関わることなら、どんなことでも独特な意味あいをおびてくる。トーマスは、この点に注目しつつ、「特徴的な相貌に惚れ込み、取り付かれるあまり、対照的な相貌を排除もしくは軽蔑する」という、注意と記憶の傾向性は、人種的偏見の心理における一つの重要な条件である。⁽¹²⁾と述べている。

人種的偏見の心理を解き明かす上で、母親の溺愛の心理そのものがどの程度の直接的有効性を持っているかどうかについては、多少疑問だが、⁽¹³⁾しかし、溺愛の心理において作動しているメカニズムに関する議論を通じて彼が強調している点は、やはり注目に値すると思われる。トーマスが力点をおいているのは、「パーソナリティーの特徴的あらわれを選び出し、それらに感情的価値を付与するという重要な傾向性」⁽¹⁴⁾であり、また「反感や愛情にとって本質的なことは、ある程度の記憶だけである」⁽¹⁵⁾という認識である。ここに見られるのは、一種の〈選択的注意 (selective attention)〉を媒介する契機としての感情 (emotion) と記憶 (memory) への着目といっている。

(3) 違いを生みだすもの——活動と注意——

ここでは、初期トーマスの基本的視座を析出するための準備作業という意味あいもこめて、先にあげたギャップ、つまり精神的能力という点では差がないにもかかわらず、経験的現実の局面になると相違が生み出されてくるというギャップを、トーマスがどのように説明しているかを見てみよう。

トーマスは、人間精神の諸機能の検討にあたって、知覚、記憶、抑制、抽象化の4点をとりあげているが、⁽¹⁶⁾ここでは、彼自身が最も力を入れて論じている抽象化の問題を例示としてとりあげる。

トーマスは、まず、原始人たちが抽象的に思考せず、言語にもその影響があらわれている点を認める。そして、その上で、「抽象的用語でもって思考する習慣」と「抽象化の能力」との相違を力説する。⁽¹⁷⁾彼が基本的事実として指摘するのは、どの人種にも言語の使用が見られることである。この点を確認した上で、言語の使用には抽象化の能力が含まれているということ、したがって、あらゆる人種が抽象化能力を持っていると見なしうる、と論を進める。

それでは、抽象的思考様式の点で現実に見られる違いは、どのようにして説明されるのか。トーマスが注目するのは、集団活動や集団の意識の複雑さと抽象化の度合との関連である。「ある集団の活動において活用される抽象化の度合は、その活動の複雑さとその集団内での意識の複雑さに依存する。⁽¹⁸⁾ある集団で抽象的思考様式が芽ばえてきにくい、とすれば、それは、集団活動がそうした思考様式を必要としないからだ、というわけである。

このように、トーマスは活動のあり方と精神のあり方とが密接に関連しあっていることを強調する。この視点を含んだ、次の発言は、彼の基本的発想の一つと見なしていいだろう。「注意の方向と精神過程の単純さもしくは複雑さは、精神が対処 (manipulate) しなければならぬ外的状況の性格に依存している。活動が単純であれば、精神も単

純である。活動がまったくなければ、精神も存在しないだろう。精神とは、外界に対処する一手段にすぎないのである。⁽¹⁹⁾」

ここには、先の問題を解く鍵がある。つまり、まず外界に対処する一手段であるという限りでは、精神のはたす機能は等しいという点を認めた上で、外的状況の性格次第で、活動のあり方も、したがってまた注意の方向や精神のあり方も違ってくる。彼は主張しているのである。これを主体的なあり方にひきつけて表現すれば、どのような対象に注意を向け、どのような活動を営むかによって、精神面での表現の仕方にも、おのずから差があらわれてくる。といってもよい。要するに、活動過程の質の違いがさまざまな〈能力〉を開花させることも眠らせてしまうこともできる、ということである。トーマスの場合、差を、違いを生み出す主要な契機は、活動と注意であると捉えられている点を確認しておきたい。

- (1) W. I. Thomas, "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," p. 41.
- (2) W. I. Thomas, "Sex in Primitive Morality," *American Journal of Sociology*, 4 (May, 1899) : p. 774.
- (3) W. I. Thomas, "Sex in Primitive Industry," p. 486.
- (4) W. I. Thomas, "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," p. 62.
- (5) W. I. Thomas, "The Relation of Sex to Primitive Social Control," *American Journal of Sociology*, 3 (May, 1898) : p. 755, pp. 762-763.
- (6) W. I. Thomas, "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," p. 59.
- (7) *ibid.*, p. 60.
- (8) W. I. Thomas, "The Mind of Woman and the Lower Races," *American Journal of Sociology*, 12 (January, 1907) : pp. 435-69. 「高等人種」「下等人種」という表現を用いているという事実自体のうちに、トーマスの偏見批判論の限界を

垣間見ることができる。彼の場合、人種的偏見、性的偏見を批判しうる視点を一定程度確保としていたにもかかわらず、人種間の文化的差異を、まさに差異として相対化するところまでは徹底化されていなかったわけである。

なお、私自身の立場ではないが、トーマスを温情主義的な性差別主義者と見なす議論としては、Herman Schwendinger and Julia R. Schwendinger, *The Sociologists of the Chair*, Basic Books, 1974, pp. 290-334. など。

(6) の「締め出し(exclusion)」と「孤立化(isolation)」という発想は、後に「人種心理学」(“Race Psychology: Standpoint and Questionnaire, with Particular Reference to the Immigrant and the Negro,” *American Journal of Sociology*, 17 (May, 1912): pp. 725-775) の中で「孤立化(isolation)」という、活動体験の質を規定する重要な契機として位置づけられることになる。

(10) W. I. Thomas, “The Mind of Woman and the Lower Races,” p. 458.

(11) *ibid.*, p. 458.

(12) W. I. Thomas, “The Psychology of Race-Prejudice,” *American Journal of Sociology*, 9 (March, 1904) : p. 596

(13) というのは、母親の溺愛の心理が人種的偏見の心理を生み出すというトーマスの議論を文字通り認めたとすると、そこで偏見を抱くようになるのは、母親、つまり大人の方であって、人種的偏見の心理の解明にとって、より重要な意味を持つはずの、パーソナリティー形成過程にある子供ではないことになるからである。

(14) *ibid.*, p. 597.

(15) *ibid.*, p. 598.

(16) W. I. Thomas, “The Mind of Woman and the Lower Races,” pp. 441-444.

(17) *ibid.*, p. 443.

(18) *ibid.*, pp. 443-4.

(19) *ibid.*, p. 446. なお、こので彼のいう〈対処(manipulation)〉とは、〈制御(control)〉と同じ意味に解していいだろう。

五 初期トーマスの基本的視座

以上われわれは、二から四までの検討を通じて、初期トーマスがどのような問題関心にもとづき、どのような問題テーマ群に取り組もうとしていたのかを見てきた。そして、その過程で、三の末尾の小括をはじめとして、初期トーマスが提示している視点をいくつか指摘してきた。それらの視点は、トーマスが彼に独自の社会認識を培っていく上で重要な意味を持っていたことは疑いえない。その意味では、それらがすべて、初期トーマスの基本的視座を構築していく上で何らかの貢献をしていると⁽¹⁾いって過言ではない。

しかし、そうした中でも、とりわけ四での検討の過程で浮かびあがってきた視点は、やはりより基本的な重要性を持っていると思われる。それは、そこでの視点が、初期トーマスの主要な二つのテーマの展開の中から抽出されてきたものだから、というだけではなく、個人や集団の発想様式を規定する基本的契機と考えられているからである。そこで、そうした点に留意しつつ、最後に輪郭だけでも初期トーマスにおける基本的視座を析出しておくことにしよう。「輪郭だけでも」という限定をつけたのは、先に「民族心理学の射程と方法」について行なったようなこまかい検討を、ここではするつもりがないからである。それというのも、私としては、四までの検討をふまえて、何はともあれ、初期トーマスの基本的視座をすっきりとした形で提示しておきたいと思うからであり、また次回には、「初期トーマスから中期トーマスへ」という標題の下に、『ポーランド農民』にいたるまでの主要な論文に見られるキーワードの変遷の跡づけを試みるつもりでいるからである。⁽¹⁾

さて、われわれはすでにトーマスのデビュー論文の検討において、彼の発想の基軸には、広義における再生産の視点と感受性の視点とがあることを知っている。

そして、広義における再生産の視点の要請に応えるべく提示されてくるのが、〈環境の制御 (the control of the

「(2)の制御(コントロール)という概念は、「未開社会を解釈するための観点」において、注目すべきキーワード(environment)である。この制御(コントロール)という概念は、」

トーマスの筆頭にあげられているものである。

トーマスはそこで「制御」を説明しつつ、〈環境の制御〉と〈活動〉との関連について次のように言っている。「あらゆる活動を翻訳しうる、あるいは少なくとも、関連づけることができる有用な概念がある。すなわち、制御という概念がそれである。制御とは、社会的力ではない。それは、実現されたものであれそうでないものであれ、合目的活動の目標(オブジェクト)のことなのだ。種が生存しうるためには、基本的に、食物と生殖の二つが必要である。……私の見るころでは、個人的活動や社会的活動に関して言いうる最も基本的なことは、そうした活動が、環境の制御を、つまりこれら二つの成果を保證すると思われる環境の制御を確保するために計画されている、ということだ。」(3)

もう一つ、今度は「社会心理学の領域」から、〈環境の制御〉と〈注意〉との関連に触れているところを紹介しておこう。「これ〔環境の制御〕は、注意という媒介を通じて確保される。注意を通じて、個人や集団生活の欲求に應えるべく、習慣が確立されるのである。」(4)

これらの引用をふまえて言えば、まずはじめに、集団や個人が否応なく直面せざるをえない課題として〈環境の制御〉という問題があることになる。その意味で、〈環境の制御〉は、環境への適応という側面を持っている。しかし、制御とは合目的活動の目標のことなから、それは単なる受動的な適応を意味しているわけではない。それどころか、より積極的に、集団や個人が自己の欲求を充足しうるように、環境を能動的に支配することと見なしうる。そして、そうした課題を遂行する上で重要な二つのモメントとして、〈活動〉と〈注意〉とが位置づけられているわけである。その際、〈注意〉が感受性の視点を受け継いで出てきた用語であることは言うまでもない。

周知のように、『ポーランド農民』においては、〈態度〉と〈価値〉の対概念や〈状況の定義〉等が、キーワードとして登場してくるわけだが、⁽⁵⁾そして、その意味では、一見したところ、ここで触れている用語自体は、中期トーマスにとって重要な意味をもたないように思われるかもしれないが、しかし、すぐ後に触れる〈危機(crisis)〉の概念とともに、〈環境の制御〉〈活動〉〈注意〉の視点が、そうしたキーワードを生み出す根源となる基本的発想を形づくっていることは明らかである。詳細は次回の検討に委ねることにして、ここでは要点だけを指摘しておけば、〈態度〉と〈価値〉とを媒介する環としての位置を占めているのが〈活動〉なわけだし、〈状況の定義〉とは、〈危機〉に直面した個人や集団が〈環境の制御〉をめざして〈選択的注意〉を発揮することだと見なすことができるのだから。

いずれにせよ、さしあたりは、〈環境の制御〉という課題との関連で、〈活動〉と〈注意〉という二つのモメントが重要な意味をもってくるわけだが、〈活動〉や〈注意〉のありようの違いは、また、集団や個人々の生活方向を決めてくるのであり、その過程を通じて独自の習慣や意識が形成されてくる、というのである。

ところで、〈環境の制御〉は常にスムーズにおこなわれるとは限らない。時には、この課題遂行の妨げとなりうる事態が発生することもある。この事態こそ、実は〈危機〉⁽⁶⁾なのである。そして、〈環境の制御〉と〈危機〉ののりこえとの関連で言えば、どのような〈危機〉に直面しつつ、それらをどのようにのりこえ(あるいは、そののりこえに失敗し)、どのような形で〈環境の制御〉をおこなうかによって、それ以前に形成されていた生活方向や習慣、意識の変容が多様に生み出されてくるという。

以上の検討をふまえて言えば、〈危機〉ののりこえを含めて、課題としての〈環境の制御〉という発想、ならびにその課題を遂行するための基本的契機として〈活動〉と〈注意〉とを位置づける発想が、初期トーマスの基本的視座

の中核を形づくっていると思なすことができた。

- (1) なお、以下での議論については、とりわけ「社会心理学の領域」(“The Province of Social Psychology,” 1905) と「未開社会を解釈するための観点」(“Standpoint for the Interpretation of Savage Society,” 1909) の二論文を参照(2)しよう。
- (2) W. I. Thomas, “The Province of Social Psychology,” *American Journal of Sociology*, 10 : p. 446, January 1905.
- (3) W. I. Thomas, “Standpoint for the Interpretation of Savage Society,” *American Journal of Sociology*, 15 : p. 154; September 1909.
- (4) W. I. Thomas, “The Province,” p. 446.
- (5) さしあたり W. I. Thomas, *The Polish Peasant*, 1, p. 20-69 を参照せよ。
- (6) 通常、トーマス自身の次のような発言を引用しつつ、「〈危機〉とは習慣の妨げのことだ」という形だけで把握されている。たとえば、「危機、すなわち習慣の妨げとの関連で」(“The Province,” p. 447) とか「『危機』という用語は、極端な意味で理解されるべきではない。それは、習慣のいかなる妨げにも含まれているのである。」(“Race Psychology,” p. 736) といった具合である。こうした例において、「〈危機〉は確かに習慣の妨げとしてあらわれてくるものと見なされていることは否定できないが、しかし、トーマスの社会認識の枠組の中で考えるなら、基本的把握の仕方としては、集団や個人による〈環境の制御〉の妨げとなりうる事態を指して〈危機〉と見なし、その一つの現象形態として習慣の妨げを位置づけた方がより正確なのではなからうか。

※ この小論は、法政大学特別助成金の援助をいただいて作成したものです。なお、第一草稿執筆の段階で、稲上毅氏には論文の構成に関して、また末広昭氏には個別的な部分にいたるまで、貴重なコメントをいただいたことを感謝します。